

## 児玉源太郎と徳山

会員 小川 宣

### はじめに

平成一四年（二〇〇二）は、児玉源太郎の生誕一五〇年である。源太郎は、嘉永五年（一八五二）に徳山に生まれた。

また平成一五年は、明治三六年（一九〇三）に源太郎によって「児玉文庫」が創設されてから丁度百年になる。

徳山の生んだ偉大な人物である源太郎については、軍人として戦略家としては語り尽くされた感がある。

また顕彰については、徳山には戦前から児玉神社があり、戦後に新設された児玉町・児玉公園があり、源太郎の産湯の井戸も百五十年間大切に保存されている。

一方、あしかけ九年間勤めた台湾総督時代は、台湾の人々にとって大変良い政治をしたそうので、微笑ましいエピソードが伝えられている。

### 一、源太郎の誕生

源太郎は、徳山藩士児玉半九郎の子として徳山に生まれた。源太郎が誕生するまでに、児玉家には二子があり、長女を久子といい次女を信子といって男子に恵まれなかった。それだけに嘉永五年（一八五二）閏二月二五日に源太郎が誕生したことは、一家の喜びはたとえるものがないほどであった。

源太郎の誕生の時、父半九郎は友人島田蕃根（著名な儒学者）の家で詩文に興じていた。慌しく児玉家か

ら家人がやって来て、男児の生誕を告げた。半九郎は  
歓喜の情を禁じがたく、直ちに島田家から帰宅して祝  
杯をあげたという。

後年、島田蕃根はその時の状況を、次のように語っ  
ている。

「私の家と大将の家は、丁度向き合っていて繁々  
と往来していた。私の家へ四・五人集まって詩会  
を催していた折に、向かいから使いが来て、半九  
郎に男の子が生まれたから至急帰ってくれと言っ  
て来たので、半九郎も小躍りして喜んで帰って行  
った。これが即ち、大将であった。

これまで子供はあつても二人まで女の子で、初  
めての男の子であるから、半九郎ははじめ一家の喜  
びは凄いいもので、私は未だに明瞭に覚えている。」  
父母親戚の限らない喜びと祝福とを受けて、その生  
誕を迎えた源太郎は、最も幸福な人というべきで、父  
半九郎は、産児に百合若と名を付け、長じてその名を  
「健」に、そして後に「源太郎」と改めた。

## 二、少年時代

安政三年（一八五六）一〇月一九日、源太郎四歳の  
時に父が亡くなり、幼少で家督が継げないので、安政  
五年に姉久子に浅見家から次郎彦を迎え、兄玉家を継  
がせた。

源太郎は、安政六年八歳で藩校興譲館に入り、文学  
を徳山藩国学の祖である桜井魁園と本城清から、撃劍  
を無念流小田切右衛門・一刀流浅見栄三郎に、さらに  
槍術を大島流浅見安之丞について学んだ。

この外に、儒学を教学院主の島田蕃根に学んだが、  
中でも文武に秀でていた姉婿の次郎彦の影響が大きか  
ったといわれている。

恵まれた環境のもとで勉学に励んでいたが、元治元  
年（一八六四）八月一二日、次郎彦が俗論派に暗殺さ  
れ、家名断絶となり、その様相は一変した。

しかし、翌慶応元年に藩論が回復し正義派が台頭し  
たので、兄玉家の家名は再興され、源太郎は中小姓と  
して禄二五石が給された。

明治元年（一八六八）一〇月、徳山藩の献功隊の半隊司令（小隊長）として秋田に出陣し、翌二年三月には函館征討軍に加わっている。そして、この年五月一日に品川に凱旋し、八月に兵部省御雇となり、引き続き軍務に就くことになる。

従つて、源太郎が徳山にいたのは、献功隊に入隊した一七歳の頃までである。

源太郎は、幕末から維新の風雲が正に動かんとする頃に生まれ、幼児期をその旋風の中で過ごしたことが、その後の人格を形成したものと思われる。

### 三、母の愛に育まれて

家名断絶し、家禄を没収された頃のことを、源太郎は後年次のように記している。

「すでに家禄なき浪人なれば、藩制に従い前髪を剃り、刀を帯び割羽織袴を着るを許されず。総髪に脇差のみを帯びて出ずれば、従来の方も一人伴う者なく、皆嘲笑して浪人浪人と呼ぶ。その声骨髓に徹し、今猶耳底に在るが如し。」

しかし、源太郎の母は古来多くの女丈夫が有していた美徳の全てを合わせ持った女性であった。堅忍の気性と美徳を備え、一方に三子一孫を相手に家名を辱めないように努めつつ、一方で源太郎たちの教育を怠らず、暇ある毎に『曾我物語』を読んで聞かせた。

そして、「曾我兄弟が父の仇を討つたように、汝らも宜しく曾我兄弟の志を心とせよ」と。

かくして、幾度となく『曾我兄弟』を読み聞かせながら、北風の寒い夜も僅かな火鉢を囲んで過ごし、親子五人が夜明けの鶏の声を聞くこともしばしばだったという。

当時の無念が深く、その骨髓に印刻して、母の教えと共に、後年の源太郎の幾多の試練にも耐えうる強靱な心身が培われ、この時の不幸は、かえって他日の幸福に連なつたのであろう。

### 四、義兄次郎彦のこと

次郎彦は、体躯は堂々としており、性格は剛毅で胆力のある人物であった。剣術・銃術に精通し、和漢の

学問にも優れていた。尊王攘夷の思想の持主で、久坂義助・入江九一・寺島忠三郎等と深く交わっていた。

元治元年（一八六四）、禁門の変が起きた時には、大坂にいたが、長州軍が敗れたことを聞いて、急いで国へ帰った。ところが、徳山藩は正義・俗論両派に分かれて議論沸騰し険悪な空気が漂っていた。

八月九日、同志の河田佳藏等が俗論党の富山源次郎を襲撃したが、目的を果たすことができなかった。そのため一二日数一〇人が次郎彦の邸宅を襲った。たまたま次郎彦は外出中であつたが、帰途に門外で出会つたので「もし事があれば、我が家で話をしよう」と家まで帰つた。

次郎彦は玄関に上がり、刀を腰からはずそうとした時に、一人が背後から切りかかつたのを合図にするかのように、一斉に斬りつけられ一命を奪われた。宅地は没収され、家禄を失い家名断絶の状態になつた。

## 五、姉久子について

久子は、父半九郎の長女で、安政三年に父が亡くな

つた時、嫡子源太郎は幼少だったので、浅見家から次郎彦を養子に迎え、その妻となる。

夫次郎彦が凶刃に倒れ、お家断絶後に再興されてからの久子は、一門の子弟の教育に携わり、仏道に帰依して報謝生活に親しんだ。昭和三年に八十六節婦として緑綬褒章を下賜されている。

このことを称えた顕彰碑が、児玉神社境内に建立されている。

## 六、児玉文庫開設から百年

平成一五年（二〇〇三）は、文庫開設から百年という記念すべき年である。この文庫は、源太郎の若い頃からの念願の末に開設されたものである。源太郎は若い頃からの体験をふまえて、自ら学問の大切さを実感し、特に読書の必要性を感じたようである。早くから手元に本を集めて、是非郷土の若い人々に読んで欲しいという夢をもっていたという。

この夢は、源太郎にとつて最も厳しい時代、即ち日清戦争と日露戦争の間に実現されたもので、一層の感

動を覚えるものである。その間には、陸軍中將で第三師団長・台湾総督・陸軍大臣を歴任または兼務しており、そうした激務の中の快挙であるので、なおさら光彩を放つものである。

**心に残る愛郷心** この文庫の価値は、イギリスの新聞でも紹介されたように、正に郷土徳山の誇りといえよう。殊に源太郎は、現今の政治家の金権体質からは程遠く、金儲けとは無縁の存在だったようである。

日頃の節制で蓄えた私財を投じての文庫であるだけに、その価値は高く、青少年に将来への夢を与えるという、郷土愛からほとばしり出る人材育成を目指したものであるだけに無限の価値がある。

## 七、児玉文庫の伝統を継ぐ中央図書館

徳山の生んだ英傑の一人に児玉源太郎がいる。明治時代後期の日本の近代化の進んだ時期の、一番冷静な指導者であった。軍人として政治家として、その能力は高く評価されている。中でも内務大臣兼陸軍大臣から参謀本部次長に天下りした。これは明らかに降格だ

ったが、日露開戦直前の状況下にあつて、それはむしろ彼に与えられた天職であるかのようであつた。

また源太郎は、日本で唯一の最高の植民地政策の成功者でもあつた。台湾総督としての文治政策は高く評価され、世界史における植民地獲得競争の頃の大きな指標にもなつたという。

源太郎は、比較的若くして亡くなり、ふるさと徳山に残した「児玉文庫」は残念なことに昭和二〇年七月の空襲で、その姿を消した。しかし、その心は今も生きつづけている。

膨大な毛利徳山藩文書は今も残っており、この児玉文庫を復活させようという戦後の動きがあつたという。それぞれの地域のもつ特性、そこに育つた人の気質などが、図書館という施設を造り、育てていく上に反映するものである。

徳山市立図書館の開館ははやかつた。全国に図書館として公認されたのは昭和二三年（一九四八）一〇月である。当時の御幸通の仏教会館の一室九坪を借用し、

年度末の蔵書数は四二九冊であった。

## 八、文庫開設百周年の記念碑建立

平成一五年一月三日、「児玉源太郎顕彰実行委員会」によって文庫開設百周年を記念する記念碑が建立され、多数の市民が参加して除幕式が挙行された。

後進の啓発を願って、ふるさと徳山に贈られた「児玉文庫」は、正に源太郎の愛郷心の発露であり、その思いは後世に伝えなければならない。

## 九、産湯の井戸

岐山通中程の東側の駐車場入口近くに「児玉家屋敷跡」の標石があり、その奥に「児玉大将産湯之井戸」がある。実際に源太郎が産湯を使ってから、一五〇年を経過し、少しいたんでいたもので、この度顕彰会で改修された。

### 七歳から井戸の水浴び

源太郎は極めて意志の強い人で、七歳で井戸の水浴びを始めてから、日露戦争の始まるまで五〇年間続けたという。水浴びは、井戸の側へ行って頭からザブツと浴びるもので、どんな寒中



改修された産湯の井戸

でも決して止めることはなかったそうで、今、井戸を眺めていると、その情景が浮かんでくるようである。

七歳から始めるようになったのは、母の勧めだったという。既に父は亡くなっていたが、母は厳格で「お前は頭脳が悪いので、是非水浴びをせよ」と言われたからで、それ以来、どんな境遇になっても決して止めることなかった。この意志の強さは「一事が万事」で、総てに通じている。

## 九、児玉神社

〓 神紋は二文字三つ星〓

大正十一年（一九二二）二月一五日、当時の徳山町の前田蕃穂外五二名の有志が「県社児玉神社創立許可願」を内務大臣に提出した。

翌一二年八月に許可書が届き、直ちに創立され、昭和八年（一九三三）五月に県社に列せられた。

神社は流造の本殿と拝殿があり、鳥居は源太郎の次の台湾総督佐久間左馬太（明治三十九年—大正四年）が遺徳を称えて寄進したものであったが、破損により昭和四二年（一九六七）再建立されたものである。狛犬は、昭和八年県社に昇格した時の建立である。

拝殿の扁額「児玉神社」は、長男秀雄の揮毫で、例祭は旧陸軍記念日の三月一〇日に行われている。

### 一〇、源太郎の遺髪塔

〓 徳山の児玉家墓所〓

興元寺の墓地で通称隠居山墓地といわれている一角に、生垣に囲まれた児玉家の墓所がある。

その中央に「児玉家累世墓」の墓石と、向かって左に源太郎の「陸軍大將子爵児玉源太郎卿遺髪塔」があ

り、その側面に「明治三十九年七月二十四日薨二十八日葬東京青山之阡九月八日瘞遺髪 於此配祖考」と刻まれている。（注）阡〓墓道、 祖考〓亡祖父

右には源太郎の義兄次郎彦・久子の夫婦墓があり、「贈従四位児玉次郎彦墓 室久子墓 昭和十二年一月十九日没」、裏面に「一休院義岳了忠居士 児玉氏第七世諱忠柄 号青田元治元季甲子秋八月十有二日卒年二三」と刻まれている。

なお、徳山の古刹の一つである万徳山興元寺の位牌堂の仏壇に、「大観院殿藤園玄機大居士」と記された源太郎の位牌が納められている。

### 一一、台湾総督時代の源太郎

日本の台湾統治は、明治二八年（一八九五）四月一七日の下関講和条約で、清国から割譲された時に始まる。台湾総督は、初代樺山資紀・二代桂太郎・三代乃木希典・四代児玉源太郎と受け継がれていく。

源太郎の台湾統治は、明治二八年六月に台湾事務局員となり、台湾電信建設部長を勤め、台湾総督には明

治三十一年（一八九八）二月二二日に任命され、同三十九年（一九〇六）五月まで八年間の長きにわたっている。

この間、総督のもとで辣腕を振るい、**台湾近代化の父**といわれたのが民政局長の後藤新平である。先ず、大規模な土地・人口調査を行い、道路・鉄道・水道・港湾などのインフラの整備をはじめ、台湾の衛生環境と医療の大改善など数々の大事業をやつてのけた。

上下水道の整備によつて、マラリア・ペストをはじめ、あらゆる伝染病が消えていき、長年の大問題に終止符がうたれ、その後の台湾の発展の基礎が培われたのは、この時である。

台湾の近代化の推進に當つて、源太郎が献身的な役割を果たしたことについて、台湾の著名な親日家で知られる蔡焜燦（さいこんさん）は、その著書『台湾人と日本精神―日本人よ胸を張りなさい―』の中で、総督児玉を、次のように記している。

「後藤新平の台湾統治成功の陰には、新渡戸稲造をはじめ各界の優秀な人材の尽力があつたことも

見逃してはならない。また、軍部の長でありながら軍部を抑え、後藤が思ひきつた行政を施行できるように取り計らつた親分児玉源太郎の度量なしに成し得なかつた偉業であることも付記しておく必要がある。」

## 一一、児玉家と小川家との関わり―回想―

### 源太郎と小川官介との接点

源太郎は、安政六年（一八九五）に藩校興讓館に入り、紆余曲折はあつたが、明治元年（一八六八）に献功隊に入隊する一七歳の頃まで勉学に励んでいたものと思われる。

一方、我が曾祖父小川官介は、天保八年（一八三七）の生まれで、興讓館から萩の明倫館で学び、江戸に出て佐藤一斎の門で学んだ。帰藩して万延元年（一八六〇）に興讓館に常居して文学の修行をし、明治元年五月に学館の助訓兼寮長を勤めている。

従つて、その間に二人が同時期に興讓館にいたことが推測される。このことが縁になって、その後の交渉



が始まったものと思われる。

### 源太郎の為書のある書

我が家の大切なものの一つに源太郎から寄せられた書があり、子供の頃から額に納められて、座敷に懸けてあった。

「貧貯月 為小川君 藤園」とあり、「藤園」は源太郎の雅号、「君」は敬意を表すもので、曾祖父官介のことであろう。

### 源太郎の形見の花瓶

明治三九年に、源太郎の長男秀雄さんから、形見の「斑石の花瓶」が届けられ、その添え書きに次のように記されている。

記

一、斑石の花瓶 一

右は甚粗末之品にて候共

亡夫の遺物の品に候間

生前の御交誼に報いたく進呈仕候

幸に御受納下され度候はば

本懐の至りに存上候

八月十一日

児玉秀雄

小川 清次様

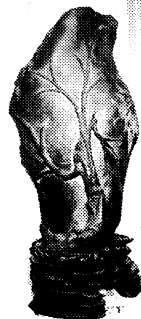
この年の七月に、源太郎は亡くなって

いたので、その形見として、ゆかりの人々に配られた物の一つであろう。両家の

藩校興譲館以来のつながりがあつたことの証として、特に私の家では代々大切にされている。

### 祖父清次の「年詞状差出先」の控えと日記

祖父清次の明治三六年（一九〇三）の「年詞状差出先」の控えによると、徳山のお歴々の中に東京牛込区市ヶ谷の児玉源太郎と赤坂区青山南町の浅田栄次の名がある。栄次は徳山の生んだ偉大な英学者で、明治の国際人といわれている。清次とは藩校から山口中学を経て広島中学まで一緒で、文字通りの竹馬の友である。



形見の花瓶

また、この頃の祖父の日記には、決まったように両家に年始に出掛けたことが記されている。また、東京での徳山出身者の集いの折には、栄次と清次と一緒に幹事をつとめ、源太郎もよく参加していたようである。

### 一三、タイワンゴウ

大正一二年（一九二三）に児玉神社が創設され、同一四年に源太郎の偉業を末永く称える記念樹として、樹高二メートルの幼木数本が台湾から取り寄せられ、境内に植えられた。

昭和三七年（一九六二）都市計画によって街路が改修される折に、伐採の話も起こったが、そのまま残すことになった。街路がこの部分だけ狭くなっているのはそのためである。

確か戦後、私が気付いた時には五本あったが、その後二〇年余り前に一本伐られ、今は四本となって歩道と車道の分離帯の中に立っている。一時衰えが感じられたが、最近すっかり勢いを盛り返して、空襲と台風にて耐えて八〇年余の命脈を保っている。

このタイワンゴウは、マツ科マツ属で、葉はゴウウマツより長く、松かさは約二倍の大きさがある。日本では他に植栽された記録はなく、このように成熟した巨樹は、マツ属の分類・利用などの研究の上で、学術的に貴重なものである。大きさは幹の根周りが三、二五メートル、高さが一八メートルある。

私は、一〇年間を台湾で過ごしたこともあって、このタイワンゴウを眺める度に、台湾のことが懐かしく思い出される。最近、台湾にお願いして、このタイワンゴウを補植してはという話があり、実現すれば正に快挙である。

### 参考文献

児玉大将傳

森山守次

藤園記念畫帖

児玉秀雄

児玉藤園將軍逸事

横沢次郎

台湾人と日本精神

—日本人よ胸を張りなさい—

蔡焜燦